２０１２年６月号・季刊 35 号

ミンダナオの風

執筆編集＊松居友　　発行：ミンダナオ子ども図書館

山菜売りの少女
右からジョイジョイ
ギンギン、クリスティン
３人とも、ＭＣＬの奨学生たち
日本から送られてきた古着を着ているので
ちょっとおしゃれに見えるけれども
とっても貧しい
お父さんは、死んだ
先住民で、土地も無く
深い谷の斜面に
竹の家を建てて住んでいる
毎朝、母さんと山菜を採って
午後売り歩く
ＭＣＬに売りに来るのでたずねた
「学校に行きたいの？」
「ええ行きたいの！」
それを期待して
ＭＣＬに来ることもわかった
「ここに住んで、学校に通うかい？」
大きくうなづいた
お母さんも大喜び
今は、ＭＣＬに住みこんでいるから
学校に通えるけれども、
家では、毎日山菜売りに街まで行くので
学校は停止していた
夜は、まっ暗な７時ごろまで売り歩く
今は、ミンダナオは夏休み
家に帰って、こうして毎日
山菜を売って歩いている

Mindano Children's Libary Foundation, Inc.
MCL

ここ3年は試練の年か

ミンダナオ子ども図書館で、今最も必要としているのは、小学生の里親支援者だろう。

経済状況が悪いせいだろうか、極貧の山岳地域で、子育てを放棄して、逃げ出していく母親や父親が後を絶たない。

ときには、夫が失踪して、精神に異常をきたして徘徊している母親も何人かであった。極度の空腹に加えて、精神的なショックがおそうと、頭がおかしくなってしまうのだそうだ。

再婚をくり返し、前の子どもを置き去りにして、村を出て行く親もいる。

さすがにコミュニティーが生きていて、そうした子たちは、村でめんどうを見ていたりするのだが、他の家庭も極貧だから学校までは、どうにもならない。そんな幼気ない子たちを目にすると、とても放っておけないので、MCLに引き取って、食べさせ学校に行かせてあげることになる。

そんな子たちが、今年はここに123人住んでいる。外部で学校に行かせてあげる子も含めると、613人のめんどうを見ている。

ここから試練が始まる。

神を信じて進むしかない。

起きなくっちゃ

コッケコッコー。ニワトリがないた。目を開けると、まだ外はまっくら。寝たまま手をよこにやると、布にふれた。母さんのかすかな暖かみが残った布。となりで寝ていた母さんは、もう外にでて、山に行く準備をしている。

谷底に一軒だけたっている、一部屋しかない粗末な竹のほったて小屋。小さな竹壁のすきまから、谷の水音がかすかに聞こえてくる。

起きなくっちゃ。眠たいなあ・・・。でも、起きなくっちゃ。母さんと、山菜をつみにいく約束だもの。町に売りにいくために！

妹たちはまだ寝ている。ギンギンは、起きあがると、ガラスも何もない開けっ放しの窓から外を見た。

「わーっ、たくさんのお星さま！」

夜空には、巨人が無数の宝石をばらまいたように、星たちが輝いている。黒い陰になった山なみの上には、南十字星。木々のあいだをたくさんのホタルたちがとんでいる。

「でも、夜明けはもうすぐのはず。あっちこっち飛びまわっていた妖精たちも、ホタルたちといっしょに、花や岩のお家に帰るころかな。」

ギンギンは、足もとですやすやと寝息を立てている妹の体をつま先でゆすった。

「クリスティン、ジョイジョイ起きなさい！山菜、つみにいかなくっちゃ。母さん、もう起きて準備してるよ。」

ギンギンは、十歳。したに7人の兄弟姉妹がいる。本当は9人だけれど、2人は赤ちゃんの時に死んだ。一番上の兄ちゃんは、町に仕事を探しにいったきり、どこにいるのかわからない。

一番上の姉ちゃんは、十四歳で結婚して赤ちゃんもいる。ご主人の実家は、ずーっとはるか山奥のアポイアポイ村。何時間も馬にのってボアイボアイ村についたあと、さらに急な山道を歩かなければならない。アポ山とよばれているたかーい山のふもとにある、マノボ族の貧しい村。

その村にはねえ、おじいちゃんやひいおじいちゃんが、日本人だった、っていう人もいるんだよ。むかーし、大きな戦争がある前まで、カリナンというところに、たくさんの日本人が住んでいて、アバカ（マニラ麻）をうえていたんだって。戦争でひどいことになったとき、その人たち、奥さんがマノボ族だったから、山に逃げたんだって。

アポイアポイは、とっても、とっても、貧しい村。今でも、アバカをうえて、手で漉いている人もいるって、母

日々の活動を、豊富な写真で、随時更新報告しているMCLのサイト
http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm
ウエッブサイト検索『ミンダナオ子ども図書館』、必見です！

さんがいっていた。

わたしたちの家も山のなかだけど、姉ちゃんのいる村にくらべると、町までは歩いていける。谷間のなかの竹でできたほったて小屋。いっしょに住んでいるのは、母さんとばあちゃん。

すぐ上の十一歳の姉ちゃんのインダイと、わたしと2人の妹、八歳のクリスティンと六歳のジョイジョイ。そして、末っ子の男の子のビビィ。

父さんは、死んだ。死んだ理由、母さんはあまり話したがらない。

父さんが死んだ後、すぐに生まれたビビィは、まだ三歳。だから山菜採りにはいっしょに行けない。インダイ姉ちゃんが残ってめんどうを見るの。

ばあちゃんの年は、はっきりはわからない。一〇〇歳を超えているという人もいるけど、杖をついてようやく歩けるぐらい。いつも家の外の石にすわっている。ときどき、ぶつぶつと不思議なことをつぶやいているけど、母さんの話だと、ばあちゃんには妖精が見えているんだって。妖精の酋長とも仲良しだって話だけど、ほんとうかなあ。

山菜つみに母さんと行くのは、わたしと下の妹二人。つむのは、水ぎわのカンコン、川ぶちにはえているタクワイと草地のパコパコ（日本にもあるワラビのこと）。

朝、4時すぎに起きて谷を登っていって、沼地や川べりに生えている山菜をつんで、それをわたしたち子どもが町に売りにゆく。黒いタライにいっぱいつめて、頭にのせて。けっこう重いの。

とつぜんギンギンに、だれかが語りかけた。

「子どもが山菜売りのお仕事するの？」

ギンギンは、答えた。

そうよ、わたしたちが町に売りにいかなければ、毎日のご飯はたべられないの。母さんには、別のお仕事があるし。

母さんのお仕事は洗濯女。村の家々をまわっては、「洗濯物ありませんかぁ。洗濯物ありませんかーーぁ」って、たずねて歩くの。たのまれた洗濯物は、川に持って行って洗って干すけど、もらうお金はわずかだし、仕事がないときもある。だから、わたしたち子どもも、山菜売りをして手伝うのよ。

「学校いってないの？」また誰かが、たずねた。

不思議だなあ、心の声かなあ、それとも窓の外にだれかいるのかなあ。

ギンギンは、ちょっと首をかしげて森を見つめた。何も見えない。でも、ギンギンは話をつづけた。

わたし、学校、大好き。一年生のとき、楽しかった。友だちもたくさん出来たし。成績も良かったから進級できた。

クラスで二番、表彰もされたのよ！

でも、二年生になって、落第した。

本当はいま三年生だけど、落第してから、学校にいっていない。

スーッと流れ星が落ちてくるように、声がまた落ちてきた。

「一年生の時は、成績が良かったのに、なぜ二年生になったら落第したの？」

ギンギンは答えた。出席日数が足りなかったから。

一年生の時は、授業が午前中だけだったから、朝早く山菜を採りにいって、大急ぎでご飯食べて、学校にかけていって、お昼前に家に帰ったら、町へ山菜売りに出かけられたの。でも二年生になると、午後にも授業があって、欠席だらけ。

「なぜ、午後の授業に出なかったの？」

山菜売りに、町まで行かなければならないからよ。

不思議な声は、少し怒ったようにいった。

「山菜売りなんかしてないで、学校に行くべきだよ！」

でも、山菜を売らないと、エンピツもノートも買えないし、お弁当を持って行けないし・・・。

「なぜ、お弁当を持って行けないの？」

わたしたち子どもが山菜を売らないと、お米も買えないからよ。

姉さんのインダイは、もう学校にいくのをあきらめている。母さんのお手伝いをしなければいけない、って。でも、わたしと妹のクリスティンとジョイジョイは、とっても学校にいきたいの。

「なぜ、学校にいきたいの？」

「大きくなって、母さんや妹を助けたいからよ。あーあ。父さんが生きて

郵便振替口座番号　００１００　０　１８０５７
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』
購読料程度の自由寄付でも結構です。よろしくお願いします。

いればなあ。」
「姉ちゃん、だれとお話ししているの？」
ふと横を見ると、クリスティンとジョイジョイが起きて、いっしょに窓から外を見ている。
「妖精いるかな。」
小さなジョイジョイが、目をまんまるに開いて、窓から夜の闇を見ながらいう。
「ぜったい、いるよ。」クリスティンが答えている。
「会ってみたいなあ。」
「会えるって、兄ちゃんいってたよ。森の中で寝たときに、夜目がさめたら、おーーーきな、おーーーーーきな、人が立っていたって。月にとどくほど、大きかったって。」
「カプゴだ、それ。」ギンギンが答えた。
「姉ちゃんしってるの？」
「ばあちゃんが、お話してくれただけ。見たことないなあ。」
「何ぶつぶつ話しているの！」
外の窓の下から母さんの声がした。
「早くおりておいで、行くよ、山菜採りに！」
「はーい。」

山菜摘み

夜空には、いちめんにお星さま。沢ぞいの踏みあと道は、ときどき流れをわたったりしながら、上流へとつづいている。人が通る道というよりも、イノシシさんたちの通り道といった感じ。ときどき、どこが道だかわからなくなる。
流れをわたるときは、そのまま川にジャブジャブはいっていくの。靴なんてはいてないもん。はだしだもん。
するとまた、かすかな声がした。
「はだしじゃ、とがった石ころや、落ちている小枝が刺さって、痛いでしょ？」
森のなかから聞こえてくるのかなあ。ギンギンは、そう思って森のなかをみまわしたけれども、ときどき風が、木の葉っぱをゆする音しか聞こえない。
はだしだと、足の裏が少し痛いときもあるけど、でも小さいときからいつもはだしだったから、なれちゃった。
「足の皮が厚くなって、靴になったのね。」

そう、でもはだしの方が良いときもあるよ。ぬれた土の急斜面を、登ったり降りたりするとき。ツルツルでしょ。靴やゾウリじゃ、すべってとても歩けない。
ギンギンは、片手で頭の上の黒いタライをささえると、小さなジョイジョイの手を引いて、沢ぞいの道を登っていった。元気でお茶目なクリスティンが先頭にたって、母さんが最後についてくる。
やがて踏みあとは流れからはなれ、沢よこの斜面を登り切ると、とつぜん平らなバナナプランテーション農場のなかにとびだした。
プランテーションというのは、外国にバナナを輸出するために、広い広い土地を買いしめた地主と、外国の会社が契約して、バナナをうえている大農場のこと。
とってもとっても広くって、場所によっては、町のそばから、はるか山のふもとまでずーーっと広がっている。

ほら、あのバナナ、農薬の入った青いビニールの袋でおおわれているでしょ。そこに巻いてある日よけの新聞、外国語で書かれている。日本語や中国語や英語の新聞がたくさんあるでしょ。
「売っている国から持ち帰った古新聞だよね。」
そう、ここのバナナを食べているのは、外国の人たち。特に、日本人と中国人とアメリカ人がおおいんだって。
「あなたたちは、食べないの？」
食べない、だって、農薬がたくさんかかっているから、危ない、って兄ちゃんがいっていた。
兄ちゃんは、バナナプランテーションの日雇いで、働いていたことがあるの。働いている人たち、みんな、防毒マスクをかけているのよね。マスクしないと危険だって。あれ見てしまったら、怖くて食べられない。
外国に出すときは、バナナを洗うからだいじょうぶみたいだけど。
ほら見て！プランテーションのバナナ農園は、他のバナナ農園とちがって、地面には草がないでしょ。除草剤といって、草を枯らすための薬をたくさんつかっているのよ。
ばあちゃんは、いってたわ。草や石

にいる妖精さんたちも、皆ここからは逃げ出してしまったんだよ。だから草もはえないんだ。ここに来ると、まるで墓地に来たようだ、って。昔はここらへんにはね、わたしたち、マノボ族しか住んでいなかったんだよ、って。

「そうよ、ミンダナオ島の外から来た人たちが、土地をどんどん買いしめて、プランテーションを開いていったとき、もともと住んでいた人がじゃまになって、追いだしていったのよ。」

不思議な声は、少し怒ったようにいった。ギンギンは、ちょっとびっくりして、声を出した。

「あなた、いったい、だれなの。ずいぶんいろいろ知っているのね。」

声は、悲しそうにいった。

「昔から住んでいた、先住民たちは、森や谷のある豊かなジャングルの中で、お金が無くても助けあったり、自然の恵みで豊かな生活をしていたの。でも今は、住んでいた場所からおいだされて、住む土地もなくなって、前よりももっとひどい貧しさになってしまった。

あなたたちも、おいだされたのよね。」

「・・・・・・・」

夜明け前の、薄暗い闇のなかのバナナプランテーションは、不気味だ。山とか沢筋だったら、いろいろな木や草がはえていて、そのなかにシダ草や、野生に近いバナナやパパイアがたくさんはえている。だけど、プランテーションには、一列にバナナが植わっているだけ。下草も生えていない。虫やネズミも出ないように、殺虫剤とよばれる毒の薬もたくさんまく。

「ジャングルならば、いろんな木や草がはえているし、虫も動物たちもたくさん住んでいるよね。」

きっと妖精たちもたくさんいるにちがいないわ。でも、ここは、まるでお墓にいるみたい。

少しずつあたりが明るくなってきた。ギンギンたちは、プランテーションを通りぬけると、仕事のためのトラック道から、ふたたび沢ぞいの道に入っていった。イノシシの踏みあとのような小道のまわりには、いろいろな花や、食べられる酸っぱい草の実もはえている。クリスティンは、赤い草の実を手で折ると、皮をむいてかじった。

赤い実は、すっぱい。でも、ちょっぴり甘い。ギンギンとジョイジョイもかじった。

ときどき川をわたったり、泥沼をよぎったりしながら、谷を登っていくと、岩のあいだを小さな滝が、いく段にも重なりながら落ちている峡谷に行きあ

たった。そこを登りつめると、とつぜん目の前が開けて池のほとりに飛びだした。母さんと三人の子どもたちは、頭にのせていたタライをおろすと、ホッと息をついた。

池の対岸には、背の高いラワンの大木が一本、夜明け前の東の空にむかって浮かびあがって立っている。

「あの木、まるで天までとどきそう！」

さらにはるか上流を見あげると、ジャングルでおおわれた山奥の斜面に、うっすらと白い筋が見えた。

「あれ、なあに？」

まだ、あまりここに来たことのないジョイジョイが、指をさしていった。

「大きな滝よ。」母さんが、答えた。

池のほとりは湿原になっているけど、その後ろは深いジャングル。高い木々がそびえ立ち、背の高いシダ草がはえている。シダ草は、草というよりもまるで木のよう。

「ホタルさんは、お家に帰ったみたい。」クリスティンがいった。

夜明け前のうす明かりの中で、セミたちの鳴き声がしはじめた。

「もうすぐ、お日様、のぼるね。」

ジョイジョイがいうと、クリスティンがこたえた。

「マノボ族の昔からのいいつたえだとね。ここにはたくさんの妖精がすんでいるんだって。ばあちゃんいっていたよ。」

ギンギンがいった。

「ときどき、あの大きな木の下に、白い女が立っているって・・・。」

「馬鹿なことといっていないで、早く山菜を摘みなさい！

そんな話は、ここではしないの！」

（続く）

電話番号：080－4423－2998（日本から現地直通）
09219603640（Tomo Matsui Cell phone in Philippines）
日本事務局；Fax 専用　093－473－7710（内容は本部に転送されます）
メール：mclstaff@zar.att.ne.jp(松居友）

街と村と3ヵ月

大野民希

ミンダナオに来て、美しいってなんだろうと思うことがしばしばある。

日本にいた時はアタリマエで考えたことがなかったけれど、もちろん美しさなんて、とても感覚的で個人的で抽象的で、これなどと言うことができないけれど、この地に来てちょっとだけ気づいたことがある。

5月、ダバオにいる。

ダバオというのはミンダナオ島最大の街で、国内でも3番目の規模の都市であり、街には何でも揃っている、みたいな大都会である。

ミンダナオが一年で一番暑い季節、そんな熱い都会にいる訳は現地の多くの人が話すビサヤ語を学ぶため。

都会の人たちはＭＣＬが普段活動している地域の人たちと比べたら段違いに体格も良く、ばっちり化粧もしてパリっとした服を着て、スタイルもよく、元来田舎者の私からすればちょっとビビッてしまう程、華やかである。

でもふと感じる。何か違うと。

特に子どもたち。カラフルな服にアクセサリーなんかも着けて、傷や汚れなんかから縁遠く、片手にお菓子なんかを持ってショッピングモールにいる子どもたち、かわいいはずなのにふわっと空を掴むかんじに心に響くものがないのである。

でも、本当のことを言うとそんな姿も特別なハレの姿だったりするのだけれど。というのも例えばＭＣＬの子どもたちが、ＨＰに載っているような読み聞かせや卒業式、はたまた自分の村に帰省する時に、まるで普通の町のイマドキの子みたいになっているように、ハレの日、お出かけの時にはこちらの人も一張羅に身を包む。その一張羅が時には文字通り一枚しかなかったりするのだけれど。なのでちょっと誤解してしまうこともある。

日曜日、村の教会できれいなワンピースに華奢なヒールのサンダルで髪も化粧もきれいにして、ああこの人はこの村でお金持ちの娘さんなんだなと思ったら、家に招かれてみると、３０分かけて山道を川を越えて歩いた先の木でできた何のことはない質素な家で、電気も水道もなかったりする。笑顔はたくさんあるけれど。

だからショッピングモールを行き交っているきれいに着飾った家族連れももしかしたら、帰れば小さな家でちょっとよれっとした服を着て倹しく暮らしていたりするかもしれない。

それはそうと、でも私は街にいる人たちにどうしても魅せられない。私がやっぱり惹きつけられるのは山を背景にした人たちなのだ。どうしてだろう。

私はＭＣＬの子どもたちを本当に美しいなあと思う。彼らは街の人みたいに新品の服や流行のアクセサリーで着飾っている訳でもなく、傷も汚れもなく日焼けもしてないきれいな肌、栄養の充実した立派な体を持っている訳でもない。でも、本当にキラキラしている。

もちろん普段のＭＣＬでの姿からハレの日にちょっと変身した子どもたちもかわいいけれど、でもシミのあるちょっと穴の開いた普段着で、ＭＣＬの中を生き生きと転げまわって遊んでいる子どもたちこそ本当にきれいだなあと感じる。

そして例えば彼らのルーツである、山奥深くの孤立した村の竹でできた小屋としか言えないような家に住み、ボロボロのサイズの合わない服を着て、くせっ毛の髪は梳かれてなくて、裸足の足は粘土質の土で泥だらけ、そんな子どもたちは本当に心から美しい。なぜならそこには輝く瞳があり、遊びがあり、生きた感情があり、人間の生命力があり、そしてちょっと知ったようなことを言ってしまうと、モノからの自由もあるから。山では人間そのものが美しく、惹きつける。それが一概に良いことだなんてとても言えないけれど、失うことを怖れている人間の退屈さが山にはない。

豊かできれいなモノを持っている都会の人たち、でも考えてみれば美しいアクセサリーや洋服は、つまりはアクセサリーや洋服が美しいのであって、それらを取った時、初めて美しい人間というものが見られるのかもしれない。見目形ではなく命の美しさ。深く刻まれたしわ、傷あと、ぼろぼろの服、くしゃくしゃの髪の内側から自然ににじみ出る美しさがあるということ、そして実はそれにこそ本当に心動かされる。

とてもなにかエゴイスティックな言い方だけれど、髪もくちゃくちゃで、ぼろぼろでぶかぶかの服を着て、山の緑を背景に、恥ずかしげにでもぱっと満面の笑みを見せてくれる子どもたちを、ほんとうにきれいだなあと思うのである。

郵便振替口座番号　００１００　０　１８０５７
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』
購読料程度の自由寄付で結構です。よろしくお願いします。

無題

松居陽

町からＭＣＬに帰る時、乗り合いバイクに乗った。後ろの座席で向かい合ったのは、赤ちゃんを連れた若いお母さん。まだ二十歳前だろうか。赤ちゃんは、生まれて間もなさそうだ。この辺りに住んでいるようには見えない。山から降りてきた人の持つ、独特な香気をまとっている。永遠を見つめるかのような深い眼差しは、町のちょこまかした心理に侵されていない表れだろうか。ＭＣＬも郊外にあるが、そのまた先のマノボの村まで行くのかもしれない。

赤ちゃんが泣き出すと、人目をちっとも気にしない様子でおっぱいを飲ませだした。その顔は少女のように無邪気で物珍しげであると共に、母親のように神々しく、慈しみを具現していた。まるでミンダナオの山のようだった。

男は、彼女を称えるために創られたに違いない。

幼い母よ、君は、幻を追いかける僕らなんかよりよほど勇敢だ。君は、現実を生きている。僕らが永遠を告げる鼓動を恐れ、時を駆ける振りをする間、君は痛みをじっと抱きかかえ、自分の子として愛撫する。

癒すこともなくただ痛みを見つめるその目の向こうには、限りない空が広っていた。僕の言葉ときたら、その子の尻を拭うことにすら使えやしない。

お母さんに抱かれ、見下ろされる感覚を思い出す。愛を教えてくれたお母さん。社会からは、恐れることを教わった気がする。学校ではよく泣いた。そのたび先生や友達が慰めてくれたけれど、僕の心にはお母さんの姿しか映らなかった。彼女が頭をよぎるたび、涙がこみ上げてきたものだ。

想えば、僕のすべては貰い受けたものばかり。記憶も、気持ちも、常に与えられてきた。それが僕であるなら、僕と世界に区別はない。個人の振りをしていても、いつか容赦ない一体性に追いつかれる。

生まれたての赤ちゃんと、いたいけなお母さん。そこには裸の美が感じられた。はかなさにだけ見え、死の隣にだけ生きる美。ミンダナオはそんな美に満ち溢れている。彼らの苦しみは、生半可なものじゃない。僕たちの知る精神的な苦しみとは分けが違う。ＭＣＬの子供たちに会ってもらいたい。

五日間満足に食べられないと、おなかが痛くなるんだよ。

恥ずかしくても、町へ野菜を売りに行かなければ、お母さんにしかられちゃうの。

片目が見えなくなっちゃって、治せるらしいんだけど、お金がなくて。

親や兄弟の死を経験した子供たちも、実際に数知れない。そんな彼らほど生き生きしていることに、不思議と不思議はない。

そんな残酷な美に打たれれば、胸が痛むかもしれない。そして、もしあなたに裸になる勇気があるのなら、その痛みに身を任せてもらいたい。癒すためではない。乗り越えるためでもない。訳もなく、ただその痛みに意識を浸してほしい。

哀れみではない。しいて言えば、愛だろうか。愛に、僕とあなたはいない。そこに無防備に感じる痛み、それだけ。意識するものとされるものは、決して割り切れない。割り切ろうとすればするほど痛みは声を張り上げ、その本性を知らしめるだろう。人に、愛は支配できない。愛の中に、人が許されているのだと。

空に散る可能性を追いつくすのもいいが、太古から変わらない心に耳を傾けるのも悪くない。さもなければ、可能性は導き手を失うだろう。

希望の誘いは星の数ほどあるけれど、絶望の中に愛を見た時、人は不自由という自由を悟るのかもしれない。

それが見えなくて、僕らは気晴らしや逃げ道のような答えを追い求めるのではないだろうか。

苦しみは良くない。苦しみは、公害か精神病の一種として処分するべきだ。押さえつけ、蓋をし、ただの思い込みだったかのようにその存在を否定する。

しかし、この母狼の目に曇りはなかった。苦しみは、愛だ。

ミッシェル・ロペス　絵

日々の活動を、豊富な写真で、随時更新報告しているＭＣＬのサイト
http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm
ウエッブサイト検索『ミンダナオ子ども図書館』、必見です！

読んで感動、支援して嬉しい
参加して楽しいＭＣＬへ

１０周年を翌年にひかえ、ＭＣＬでは、年間のスケジュールや業務、体制などの抜本的見直しを行っています。

すでに経理や会計、領収書や対外業務のチェックと管理体制の見直しが、１月から始まり、ほぼ完了しました。

これによって、フィリピンのＮＧＯで起こりやすい支出の無駄や領収書の不正をすべてチェック管理し、無駄を出さない効率的な体制が確立しました。結果、皆さんからの寄付は、今まで以上に効率よく無駄なく現地へ、１００％届くようになります。

業務の見直しにより、総会を隔月奇数月とした関係で、年間スケジュールと季刊誌発送に、若干の変更が生じました。

発送月を６月、８月、１０月、１２月、４月に変更します。

季刊誌は、対外スタッフの大野民希と松居陽の記事に、新たに連載を加え、１２ページに増加させ、単なる報告書を超えて、読み物としても充実させていきます。

サイトでも、会員専用ページを準備しています。読んで感動、支援して嬉しい、参加して楽しいＭＣＬへ。

年間スケジュールなどの変更（重要）

ＭＣＬの年度開始は、４月からです。以下、概要と変更点を述べていきます。

Ⅰ、学生総会を年６回に

ＭＣＬの高校生と大学生がすべて集まる学生総会が、隔月（奇数月）の最終日曜日になりました。

５月・シンポジウムと学生役員選挙
７月・先住民族の文化祭
９月・移民系クリスチャンの文化祭
１１月・卒業生・現役学生交流会
１月・イスラム教徒の文化祭
３月・年度末総会

Ⅱ、季刊誌『ミンダナオの風』お届け月の変更

学生総会で支援者の方へサンキューレターを子どもたちが書く都合上季刊誌『ミンダナオの風』お届け月を、６月、８月、１０月、１２月、４月に変更させてください。

Ⅲ、季刊誌『ミンダナオの風』の紙面の増加と充実

１２月に、スカラシップと里子支援の方々には子どもたちからの新年クリスマスカードを入れた、クリスマス新年号を新たに発行します。

年５回発行と同時に、ページ数を４ページ増やし、連載や読み物としての充実を図ります。

季刊誌『ミンダナオの風』を心から楽しみにしている、生き甲斐にしている、と言う多くの方々からのお声を受けての対応です。

今回は、単なる報告だけではなく、児童文学作家でもある松居友が、子どもでも読めるファンタジーを交えた連載を開始しました。

海外スタッフの大野民希や松居陽の文章や詩や作品。ＭＣＬをたえず訪問してくださる方々の報告も掲載予定です。

また、子どもたちが独自に集めたマノボ族の昔話の翻訳や創作、現地の若者やスタッフの記事なども載せていく予定です。

単なる活動報告ではなく、文化プロジェクトの一環として、創作、民話、現地の分析報告、思想、民俗文化、哲学など今後読み物としての充実を図っていきますので、ご期待ください。

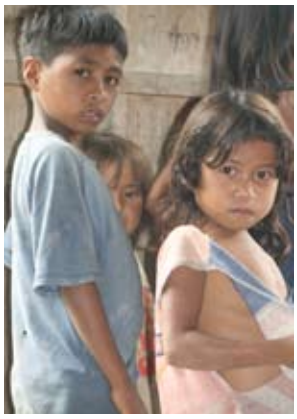
季刊誌は、スカラシップや里子支援、保育所建設やゴムの木の植林支援をいただいた方々はもちろんのこと、購読料として自由寄付をくださった方々にお送りしています。

Ⅳ、ウェブサイトに会員専用ページを設置

季刊誌『ミンダナオの風』をお届けしている方々を登録、パスワードをお渡しし、ウェブサイトの会員専用ページに入れるようにホームページを作り替えていきます。

このサイトで、現在支援者がまだ見つかっていない子どもたちの紹介。季刊誌だけでは載せきれない、会員のみが読める連載や記事。子どもたちの報告や写真なども充実させていきたいと考えています。

また、会員どうしの交流の場にもしていきたいと企画しています。準備中ですが、楽しみにしていてください。



スカラシップと里子奨学制度・再確認

ミンダナオ子ども図書館の活動の根幹は、読み語りと文化プロジェクトです。
活動の中心をになうのは、スカラシップと里親に選ばれた子どもたち自身です。
現在、大学生102名、高校生244名、小学生276名、合計で622名。

原則的には、一人の子どもに、一人の支援者を探して付けるのですが、そのすべての子たちの支援者が見つかっているわけではありません。それどころか、現在、大学生２４名、高校生７６名、小学生１５７名、全体で２５７名に支援者がいません。

「選んだ子どもたちは、すでに学校に行かせてあげているのですか？」

その通りです。ミンダナオ子ども図書館では、採用した子はすべて学校に行かせています。
支援者の無い子たちの学費、学用品、制服などは、自由寄付や残存予算を充てています。

ミンダナオ子ども図書館は、最貧困層でしかも家庭環境の厳しい孤児や片親や崩壊家庭の子たちにこそ、未来の希望を託し、平和で貧困のない社会を実現してもらいたいと思っています。
スカラシップと里子制度自体が、難民救済と生活自立支援の二つの意味を持っているのです。

見捨てておけない、放っておけない子どもたち。また、戦争や洪水、土地搾取で追われ、極貧で日々の生活にも窮している子どもたち。そうした困難な地域のなかでも、とりわけ極貧家庭から、孤児、片親、崩壊家庭の子たちを優先して、里子、スカラシップ候補にしています。

今年は、世界的な経済危機のあおりで物価高がひどく、米は８年前の２倍、塩やエンピツなどの学用品も値上がり、わずかな値上がりが極貧家庭を直撃。
悲しいことですが、救済を必要としている子たちの数は非常に多くなっています。

そういった極貧地域や厳しい環境の子どもたちのなかでも、とりわけ厳しい状況の子たちを、一人ずつ現地で面接して、スカラシップや里子として採用していきます。

採用のさいの優先基準は、親の無い子（孤児），片親の子、崩壊家庭の子たちですが、親がいても兄弟姉妹が多く（平均して７名ほど子どもがいる家庭が普通です）戦闘や土地搾取によって、山岳地に追われた家庭の場合は、日々の食べ物にも事欠く状態です。

沢でカエルやカニ、山芋で食いつなぎ、一日３食はおろか数日食べられないときもあり、学校にお弁当も持っていけない子が多く、一年生に就学しても２年生で７０％が停学したりする村もあります。２年生になると、午後の授業が出てきて、お弁当を持っていけないからです。
そのような家庭から、一人でも大学生が出ると、貧困から脱出し家庭の未来が開かれます。

ミンダナオ子ども図書館本部に住みたい子たちが、今年は激増！

上述のような、最貧困層の子どもたちまたは孤児の子たちは、豚の世話や便所掃除、野菜売りやサトウキビ労働などの児童労働に駆りだされているケースが多いのです。親がいても三食たべられず、お弁当ももっていけず、学校まで１０キロ近い道のりを４時に起きて通ったりしています。ミンダナオ子ども図書館は、そうした子どもたちに下宿小屋を建て、寝床と食事を提供し、特に厳しい状況の子は、ＭＣＬ本部に住みこんで、学校に行けるようにしています。しかし、下宿小屋もまだ足りず、経済崩壊の今年は、ＭＣＬ本部に住みたい子たちが激増しています。

支援方法：通信欄に『スカラシップ希望』（高校大学生・年額６万円）または『里親希望』（小学生・年額３万円）と書いて、下記へ振り込んでいただければ、現地より紹介のお手紙をさし上げます。
郵便振替口座番号　００１００　０　１８０５７
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』

ＭＣＬ本部は飽和状態。

本部に住みこんでいる子どもたちが、１００名を超えています。大半は孤児や崩壊家庭ですが、両親がいても貧しく、学校まで遠すぎて通えない子たちもいます。

ＭＣＬ本部に住んでいる子たちには、宿舎や食事、生活用品のすべてを提供していますが、大学生の下宿を加えると、学費を除いた食費と生活費だけで年間で７００万円をこえる経費がかかります。一日で、１００キロの米が消費されます。自由寄付や残存予算を充てていますが・・・

現在６２２名の子どもたちを学校に行かせ養ってくださっているのが、支援者の皆さん方です。

ミンダナオ子ども図書館の活動は、読み聞かせ、医療、スカラシップと同時に、戦争や洪水避難民救済など多様です。同時に、活動範囲も、戦闘の絶えないイスラムや先住民族の反政府地域、４ＷＤや馬でしか到達できない山岳地域、舟でしか行けないリグアサンの広大な湿原地域、そしてダバオ市の海に張りだした貧民街にいたるまで、小さなＮＧＯとしては非常に広大な地域です。

そこに、毎月学用品をとどけたり、支援者にお送りする手紙を書いてもらったり、写真を撮り成績表を受けとったり、さらに家庭を訪問し生活状況の調査をしたり、読み聞かせに訪れたり医療をしたり、戦争や洪水の避難民救済に向かったりと、１０年にわたる途切れることのない継続的な関係を地域の人々と持っています。

皆さんの支援は、子どもや親に喜ばれるだけではなく、僻地村やコミュニティーそのものにも、大きな希望をあたえ、平和構築にも大きく貢献しています。

コミュニティーの信頼を得るのが何よりも大切。

その活動実績が、とりわけ現地の人々に深く受け入れられ、信頼を得ている結果になっています。普段でしたら、戦中のイメージの悪い日本人に子どもを預けるなどということは、考えられない事でしょうが、本人の希望と親の希望が一致して、また身寄りがないが故に、ＭＣＬ本部に住みこみで学校に通いたいという子どもたちが増えています。

ＭＣＬは、孤児施設ではなく、子どもの希望と保護者の希望で住むことが出来ますが、翌年、遠くても故郷の学校に通いたい場合などは帰ることが出来ます。

国際組織との連携も・・・

範囲の広さと活動領域の深さ、そして現地の人々の信頼。こうした活動を見ているからでしょうか、国際停戦監視団やＵＮＨＣＲ（国連難民高等弁務官事務所）ＪＩＣＡや地元のＤＳＷＤなどからも協力を依頼されたりしますし、可能な限り協力しています。

ぜんぶの子たちが、学業成績優秀とは限らない難しさ。

普通のスカラシップならば、先生の推薦などで成績優秀で困難な環境の子を候補者として選らんでもらうでしょう。しかし、ＭＣＬは、家庭環境が厳しく孤児など極貧の子たちを、スタッフと私自身が現地で実地調査をして一人一人選ぶが故に、難しい問題が一つ出てきます。学校に心底行きたい子たちを個人面接して選ぶのですが、すべての子が成績優秀とは限らない事です。

特に孤児や母子家庭の場合などは、いろいろな困難や家庭状況からやむを得なく中断する子もいます。中断で多いのが、サトウキビ刈りや山菜売り、ゴムの汁集めの日雇いなどのチャイルドレイバー（児童労働）です。

支援方法：通信欄に『スカラシップ希望』（高校大学生・年額６万円）または『里親希望』（小学生・年額３万円）と書いて、下記へ振り込んでいただければ、現地より紹介のお手紙をさし上げます。
郵便振替口座番号　００１００　０　１８０５７
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』

女の子の場合は、野生のイモやバナナ、おかずのカエルやトカゲを採りに行ったり、下の子の世話や家事育児、洗濯、水くみそしてたきぎ集めです。洗濯や山菜やカエルとりのために、下の川まで一時間以上かけて、洗濯物をかついでいきますし、小学生でも薪にする大きな枝を沢山かついで家に帰ってきます。１４歳ぐらいで結婚を強制される事もあります。

この問題を解決するためにさまざまな対策をこうじているのですが・・・

ＭＣＬ本部に、子どもたちが住んで学校に通えるようにしている、大きな理由は、学業停止を避けるためです。また、停止によって支援者を失望させたくないので、今年から紹介する前に数年「様子見の期間」をおき、わたしたちで教育し、学業も安定してから紹介する方法を取ることにしました。ですから、支援者の無い子のなかには様子見期間中の子もいます。

救済の必要性と大学までの道筋をどう両立させるかが、大きな課題。

これは、本来すべての子どもを産んだ親が抱える問題ではないでしょうか。すべての子が勉学に興味があり、成績優秀で知能指数が高いわけではありませんし、母子家庭などの事情で、労働を優先しなければならないケース、虐待や孤児の場合には独特の困難が加わります。

学校教育だけが全てではないのですが、フィリピンを見ていると、金持ちだけが大学に行け、行政機関や会社に就職して高給をとって社会を動かしている、と言う不平等が感じられてなりません。それを打ち破る手段として、極貧で困難な子にこそ、大学教育をあたえたいと思ってはじめたスカラシップですが、現実は厳しく、賄賂とコネ社会といった慣習もあるので、極貧層がたとえ成績優秀で大学を卒業しても、道が簡単には開けないという事実はあります。

今年も高校や小学校の総代やトップ成績は、MCLの子たち、でもなかには落第生も出てきます。

そんなわけで、学校の先生からは、皮肉られて、「ＭＣＬのスカラシップの子は、優秀な子も沢山いるけど、ぜんぜんだめな子もいる、変なスカラシップですねえ・・・」と言われます。

しかし、成績優秀な子が、社会で意味のある仕事をなすわけではないですし、 エリート教育で社会が良くなるくらいなら、世界から戦争や貧困などとっくに消えているでしょう。ＭＣＬのスカラシップは、指導者を育てるためにあるのではなく、極貧のさらに下の子たちが、普通並の人間らしい生活と子育てが出来る状況に立つことをまずは優先目標にすえています。

すべての子が頭脳明晰でもないので、その子にあった道、自立就業の道をスタッフと検討して、最終学歴が小卒や高校卒業でもまた何らかの理由でスカラシップを停止しても、一年間の専門技術学校でドレスメーキング、自動車修理、コンピュータ技術などを学ばせてあげています。

ご安心ください。小卒や高卒の子、途中で停止した子たちも、自分にあった自立の道を歩んで行っています。成績も人並みで、がんばって４年生の大学を卒業した子たちは、現時点で９３人、その多くは、学校の先生、看護師、ソーシャルワーカー、農業、エンジニア、オフィスワークなどで働いています。自動車修理工場で働いている子も、銀行で働いている子もいます。

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、大学まで行くことを前提としていますが、一人一人の才能や状況に合わせて、自分にあった道を開けるようにしていると同時に、宗教や種族の違いを超えて友情を結べる場であり、読み聞かせや難民支援でボランティアを体験できる場でもあるのです。将来困ったことがあったらいつでも帰っておいで、赤ちゃんが生まれたら見せにおいで、と話しています。彼らのとって、ミンダナオ子ども図書館は、第２の家庭でもあるのです。

支援方法：通信欄に『スカラシップ希望』（高校大学生・年額６万円）または『里親希望』（小学生・年額３万円）と書いて、下記へ振り込んでいただければ、現地より紹介のお手紙をさし上げます。
郵便振替口座番号　００１００　０　１８０５７
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、
一日三食たべられないときと、
お金が無くて学校に行けないとき
病気になっても病院に行けないとき・・・

ミンダナオ子ども図書館支援方法

１、医療や読み聞かせ活動を支援して下さる方々へ・・・自由寄付（購読料のつもりで気軽に）

直接下記の振替口座にお願いします。寄付をくださった全ての方々には、。
年四回、４月、６月、８月、１０月、１２月に季刊誌『ミンダナオの風』をお送りしています。

２，大学生高校生スカラシップ支援の方へ・・年額６００００円（月額５０００円）

振り込み用紙の通信欄に「スカラシップ」と書いて、一部振り込んでいただければ、
年５回の季刊誌に同封して、本人からの手紙、４月スナップ写真、６月に成績表
８月にプロフィール、１０月は機関誌のみ、１２月にクリスマスカードなどが届きます。
新規奨学生の紹介は、随時プロフィールと写真をお届けします。
文通やプレゼントも可能です。訪問の際は、自宅にご案内します。

３，里子支援（小学生）・・・年額３００００円（月額２５００円）

振り込み用紙の通信欄に「里子」と書いて、一部振り込んでいただければ、季刊誌に同封して、
４月にスナップ写真、６月は機関誌のみ、８月にプロフィール、１２月にクリスマスカード
が届きます。新規里子の紹介は、随時プロフィールと写真をお届けします。
文通やプレゼントも可能ですが、隔月の学用品と一緒に僻地に届けて返事をもらうため
返事は機関誌に同封する形で半年ほど後になる可能性があります。訪問の際は自宅にご案内。

４、保育所・下宿小屋建設支援・・・３０万円（分割可能になりました）

振り込み用紙の通信欄に「保育所」または「下宿小屋」と書いて振り込んでいただければ、
季刊誌をお送りすると同時に、１０月には毎年現地の保育所や下宿小屋の写真報告をお届け。
開所式参加や訪問も可能です。

５，植林環境支援・・・５万円（ゴムの木６００本、１ヘクタール、現地作業代込み）

洪水対策と先住民族が土地を手放さないようにするための、自立支援です。

６、古着等の物資支援・・・郵送およびフィリピン宅配フォーレックスが便利です。

詳しくはウエッブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館」
http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm

郵便振替口座番号　００１００　０　１８０５７
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』

スカラシップ・里親に関する質問、または現地訪問その他に関する問合せは、電話かメールかファックスで。
日本事務局は、完全ボランティアのためFAXのみ受け付けています。
メール：mclstaff@zar.att.ne.jp(松居友)
電話番号：080－4423－2998（日本および日本から現地転送・松居友）
09219603640(Tomo Matsui Cell phone in Philippines/ 現地携帯・フィリピン国内ではこの電話番号へ)
日本事務局；Fax 専用　093－ 473 － 7710（内容は本部に転送されます）
現地住所：Mindanao Children's Library Foundation, Inc.
Brgy. Manongol Kidapawan City North Cotabato 9400 Philippines